

壹岐さんは、野外活動を通じて子どもたちにたくましくなってほしい、自立につながるきっかけにしてほしいと願っている。

野外活動が生むミラクルと笑顔の裏にある苦労



▲霧島おむすび自然学校の「おむすび」という名前の由来は、最初の拠点であった都城から見える高千穂峰がおむすびのように連なっていたことから。転じて、連なった山のように人と人を「結ぶ」という意味や、山頂でみんなでおむすびを食べようというキャッチフレーズにもなっている。

子どもたちは、活動の中で周りの子どもにも影響を受け、普段はできないようなことでも自分でチャレンジしようとするという。壹岐さんの活動は、子どもたちの冒険心を生み出すきっかけにもなっている。そんな子どもたちの変化に一番驚くのが保護者だ。「こんな表情は普段見たことがない」「我が子がこんなミラクルを起こすとは思わなかった」と話す保護者も多い。

だが、自然学校では何かを達成するように指導することはできない。「我々の活動には和気あいあいという言葉がぴったり。今日一日が楽しければいいねといつもみんなと話しています」。一方で、楽しい活動の裏には苦労もある。企画から準備、運営までを壹岐さんが一手に担っており、当日を迎えるまでの様々な準備に時間や体力を奪われる。当日は、安全に活動を終えるまで気が抜けないという。そんな壹岐さんを影から支えるのは、妻の典子さんだ。活動開始当初からの協力者であり、一番の理解者でもある典子さんの支えは、活動を続けるうえでの大きな力となっている。

子どもたちと歩んだ24年活動に込める未来への想い

壹岐さんは今、障がいの有無に関わらず、全ての子どもたちに対する野外活動



▲④沢登り ⑤カヤック体験の様子。楽しく活動することが壹岐さんのモットーだ。

の機会づくりに取り組んでいる。活動の中で今の子どもたちは、自然とふれあい、危険予知能力を高めるような経験をする機会が少なくないという。もつと子どもが野外で活動できる場が必要だと話す壹岐さんは、現在市からの委託を受け、市内の小学生向けにキャンプ体験を実施している。今後は、幼稚園や保育園の小さい子どもたちのために、自然とふれあえる活動の場、野外活動のプログラムをつくりたいという想いも語る。

壹岐さんの活動は今年で25年目を迎え、昨年12月には「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞した。「参加してくれていた子どもたちが大人になった今でも参加してくれており、子どもたちにとって一生懸命にわたる活動になってきている。1年でも2年でも長く活動を続けて、保護者と一緒に彼らの成長を見守っていきたいです」。活動を続けていくための体力づくりも仕事のうちと笑う壹岐さんは、これからも子どもたちと一緒に一歩ずつ歩み続ける。

「障害者の生涯学習支援活動」に係る
文部科学大臣表彰受賞
霧島おむすび自然学校 事務局長
い き ひろ ひ こ
壹岐 博彦 さん (58)



はじまりは登山 子どもたちと高千穂峰へ

「自然の中に子どもたちを連れ出すと表情が変わるんです」。そう話すのは、知的障がいや発達障がいのある子どもたちの野外活動を企画・支援する「霧島おむすび自然学校」の事務局長を務める壹岐博彦さんだ。自然学校では、登山やカヤック体験、沢登り、地元農家との協働による梨狩り、そば打ち体験など、季節に合わせてさまざまなイベントを月一回のペースで実施している。壹岐さんは、特別支援学校の教員だった1995年に自然学校の前身となる「おむすび登山会」を立ち上げ、高千穂峰登山に挑戦をはじめた。当初は、集団行動が苦手な子どもや、コミュニケーションが難しい子どもには登山は無理ではないかと心配する声もあった。だが、山岳会をはじめと



▲野外活動で子どもたちが見せる普段と違った表情に、保護者からは驚きの声上がる。

する多くのボランティアの協力を受けて安全管理を徹底し、子どもたちと無事に登山をやり遂げることができた。「子どもたちは、みんなと一緒に行動しないと危ないということをもっと理解し、登山をやり遂げた。この登山の経験を元に、子どもたちにもっと多くの体験をしてもらいたいと思うようになりました」。壹岐さんはその想いを実現するために、支援学校を退職して活動に専念。2008年には「霧島おむすび自然学校」として新たにスタートを切った。